

氏名(国籍)	コストフ, マーティン ペトロフ (ブルガリア)		
学位の種類	博士(デザイン学)		
学位記番号	博 甲 第 2983 号		
学位授与年月日	平成14年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	芸術学研究科		
学位論文題目	A Study on Origins and Evolution of the Urban Form Focused on the Street Pattern of the City Centers (都市の中心部街路パターンから見る都市形態の起源とその発達過程に関する研究)		
主査	筑波大学教授	博士(デザイン学)	原 田 昭
副査	筑波大学教授	工学博士	三 村 翰 弘
副査	筑波大学教授	工学博士	大 村 謙二郎
副査	筑波大学講師	博士(工学)	野 中 勝 利

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、都市の起源とその発達について、街路パターンを中心とした都市形態に焦点を当てた形態学的研究である。一般の都市史が、都市の形状についてそれを必然化した根拠を往古の史的史料にもとづいて論証するという史学的な帰納的方法を取るのに対して、本研究は、結果として出現した都市形態を諸要素ごとに分解してその変遷(連続的、非連続的)をたどることによってそれが形成された根拠・理由を解説するという演繹的方法を取るのが重要な方法的特徴である。本論文は、その分析・解説の手段として、街路を形態要因・形態要素ごとに「発達ネットワーク」のダイアグラムにツリー構造型に構築するシステムを案出した。そのことにより、従来の都市形態論が一時代・一時期の都市形態の「静的な」形状について個別的に論及するにとどまっていたのに対して、発達・変遷に伴う都市形態の変容を時系列に沿って「動的に」把握できるという、ダイナミズムの実態を究明する大きな方法的長所を得ることになった。こうした独創的な解説方法を4つの都市に対して適用し、その応用性を検証しつつ、それらの相対的な比較考察を通して、「発達ネットワーク」システムの有効性が論証され、さらに、演繹的アプローチとしての本研究の意義が確認されている。

論文構成は、本論5章と参考・参考文献一覧より成る。

第1章は、本研究の背景・目的・仮説・対象について記述されている。「背景」では史学的方法によらない既往の都市形態論が内外にわたって検討され、「発達」に伴う都市形態の変容を探求する視点の不十分さが確認され、それが、「目的」におけるダイナミズム視点の導入と「発達ネットワーク」システムの構築という方法論に結びついている。また、同時に史的資料に依るのではなく結果としての都市形態の解説から都市形成の背景・根拠を演繹的に考察するという方法上の特徴が強調されている。「仮説」の項では、形態要因・形態組成・形態要素・パターンの各々の概念規定と関係が位置づけられて研究の前提が整備されている。

第2章は、研究の方法について詳述したものである。用語の定義/パターン分解と要素の分類/分析の基本原理解/統合としての発達ネットワーク/研究の全体構造とその流れの順で述べられている。「分析の原理」では、形態要素を場所の関数として見なす論理学的関係式の考え方を援用して、その関数が形態(要素)を必然化する「関係性」をもたらすものであるという立脚点を明示している。この「関係性」は、叙上のように、発達ネットワークの構築によって、演繹的に推論されるものである。

第3章は、パターンの類型化を扱ったものである。まず、都市形態の分解の前提として、延伸-圍繞、放射-部分、計画-非計画などの2分法や、軸・交点・三差路・星型、切線・直交・斜交などの形状の類型を組み合わせ、理論的な形態要素を27類型に整理提案した。それらの各類型は、既述の関数型関係式に基づいて設定されている。次に、前章で詳述された、各項とその関係に基づき、「発達ネットワーク」の図式化（ダイアグラム化）の構築原理とそのプロトタイプが示され、本研究の具体的な分析手段が明解にされている。

第4章は、ケーススタディの部分である。ローマ時代からの長い歴史をもつこと、発達・変遷に伴い多くの形態変容が惹起されるような異文化縦断的な歴史をもつことを共通的な条件として、ベイルート・ソフィア・ウィーン・ミラノの4都市が対象とされた。それらの都市について、ローマ期・中世・近世・近代・現代・現在の6～5期にわたる各時代の都市図を資料として、都市形態に対して街路パターンに沿った分解・解読の作業が施され、各都市、各時期ごとに「発達ネットワーク」のダイアグラムを抽出・構築している。

最終第5章は総括・結論の部分である。4都市の時期別比較、4都市ダイアグラムの層別（クラスター・形態要因・時期区分・形態影響）比較、「関係性」=形態発生根拠・背景の類推などの総括的検討を行って、結論的に、分析手段としての「発達ネットワーク」ダイアグラムの有効性と演繹の方法としての本研究の形態学のアプローチの有用性が確認されたことが主張され、総じて都市形態研究における本研究の独自の意義を述べて、本論文を結んでいる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、都市形態に関する形態学的研究である。都市形態については、これまで多くが都市史の研究者による帰納的な史学的方法によってなされており、史的資料が整っているごく少数事例においてその形態を生んだ根拠・理由が明解にされてきた。しかも、それらは、ある一時期・一時代の都市形態の時間的切片についてのみ論証するという「静的な」形態論にとどまっていた。都市は、元来、時代を超えて時間的に発達・変遷するものであり、したがって形態も時間の経過とともに変容する「動的な」ものである。多くの場合その都市の形態を必然化したことを示す史的資料の入手が困難なこと、いく時代にもわたる時間的経過をカバーする「動的な」形態変容の把握が重要であること、この2つの状況課題に対応した都市形態研究のあり方に鑑み、本研究が、形態学のアプローチによる演繹的方法を取ることによって、この両課題に応えたことは、都市形態研究において十分に一石を投じる価値を有するものである。すなわち、史的資料が乏しい多くの都市についても、その都市形態の変遷を示す地図のような資料があれば、それらの形態の変容の根拠・背景をも推定できるということを論証したのである。

「論文の構成」「内容」については、既往関連論考の検討に始まり、目的、用語定義、方法論、分析手段の構築、ケーススタディ、比較検討、総括的考察の順に十分説得力をもつものとなっている。

ことに、時代を超越した形態変容の把握・分析手段として案出された「発達ネットワーク」のダイアグラムは、都市形態中の個別街路をツリー型構造に時系列的に組み込むもので、きわめて独創的なものである。このダイアグラムを4都市に適用して、2000年近くにわたる各都市の各時代の形態的特質とその変容の背景を推論することができた。このことは、これまでの都市形態論が容易に獲得できなかった大きな成果を示し、その存在意義は大きく、都市形態研究分野への学術的貢献は、けして小さくないといえる。

一方、「発達ネットワーク」の再現可能性、質的変容への柔軟な対応などについては、なお質的向上の余地もあると考えられ、今後の研究展開による精緻化・十全化の方向が期待される。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。